

信 行 要 文 ③

第十二回 法華講夏期講習会 第三期

（平成二十七年五月三十一日）

皆さん、おはようございます。

本年度の法華講夏期講習会第三期に当たりまして、テキストの四ページの八『妙一女御返事』から勉強していきたいと思います。

8 妙一女御返事

又法華經の即身成仏に二種あり。迹門は理具の即身成仏、本門は事の即身成仏なり。今本門の即身成仏は当位即妙、本有不改と断ずるなれば、肉身を其のまゝ本有無作の三身如来と云へる是なり。此の法門は一代諸教の中に之無し。文句に云はく「諸教の中に於て之を秘して伝へず」等云云。（御書一四九九〇一行目）

この御書につきましては『法華即身成仏抄』という別称も付いておりますように、弘安三（一二八〇）年十月五日、妙一女からの即身成仏に関する質問に対して、認められた御返事であります。

この御書には、まず即身成仏の法門の重要性について仰せられ、立宗の日から二十七年間、説いてきた法門は繁多であるが、そのなかでもこの即身成仏の法門こそが最大の眼目であり、この一大事を深く心に留めなければならないと述べられているのであります。

次に、華嚴宗あるいは真言宗、法相宗等の学者達の即身成仏に関する誤った見解を指摘し、真実の即身成仏の法門は、ただ法華經にのみ説かれていることを、竜女の成仏を挙げて証明されております。

このテキストの御文には、竜女成仏については特に記載がありませんが、皆様方も御承知のように、この竜女は海中の竜宮に住む娑竭羅竜王の娘で、蛇身の畜生であります。法華經の提婆達多品で即身成仏したのであります。

爾前經におきましては、女性には「五障三従」ということが説かれておりました。つまり「五障」とは五つの差し障りという意味で、女性は梵天王・帝釈・魔王・転輪聖王・仏の五つには成れないということでもあります。また「三従」とは三つ従うということで、女性は、まず幼き時には親に従い、それから嫁に行っては夫に従い、老いては子に従う、ということが説かれていたのです。

また、華嚴經には、

「女人は地獄の使ひなり。能く仏の種子を断つ」（御書 三五九〇等）

とあり、あるいは涅槃経には「すべての河川が曲がっているように、女性の心も曲がっている」と説かれます。ともかく法華経以外の経々では女性に対して、このように評価しているのです。

しかし、法華経に来たって初めて、畜生である竜の、しかも、わずか八歳の女性が成仏の相を示したのであります。

大聖人様は、このことについて『開目抄』に、

「竜女が成仏、此一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらわす。法華経已前の諸もろもろの小乗経には、女人の成仏をゆるさず。諸の大乗経には、成仏往生おうじょうをゆるすやうなれども、或は改転あるい かいてんの成仏にして、一念三千の成仏にあらざれば、有名無実う みょうの成仏往生なり。挙一例諸と申して、竜女が成仏は、末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし」(同 五六三)

とお示しになって、この竜女の成仏は末代の一切の女人の成仏を示したものにほかならぬと仰せになっております。

爾前経においても一往、女人の成仏は許しているのですが、それは即身成仏ではなくして「改転の成仏」なのであります。つまり、女人が女人の身を改めて、一度、男子になって、これを「変成男子へんじょうなんし」と言うのですけれども、それから成仏することを、改転の成仏と言うのです。それに対して、法華経においては即身成仏すなわち、その身そのまま、女人が女人のまま、成仏をしていくということで、そこに大きな差があるのであります。

そういう意味からすると、爾前経では悪人が善人になって成仏をするという手順になるのですが、法華経は、この妙法蓮華経を唱えていくことによって、悪人は悪人のまま即座に、即身成仏をしていくと説かれているのです。

また、続いて「一念三千の成仏」とありますが、これは一念三千の法門が説かれている法華経による成仏のことを示されているのであります。これは即身成仏と全く同じ意味でありまして、爾前経では十界に差別があるのであります。とりわけ、二乗に対しては「永不成仏」と、二乗は絶対に成仏できないと説かれてきたのであります。同様に、女人や悪人の不成仏も説かれたのであります。

大乘経になると、今言った改転の成仏は説かれましたけれども、それはあくまでも即身成仏ではないのです。また、舍利弗しやりほつなどの二乗は不成仏と嫌われていたところ、法華経に来て初めて成仏が許され、さらに地獄界の提婆達多、あるいは畜生界で女人の竜女の成仏も説かれたのであります。つまり、法華経において、それまで説かれなかった十界すべての成道が示され、ここに一念三千の妙理が明らかになったのであります。

末法こんじ今時から言いますと、この「一念三千の成仏」とは、真の事じの一念三千である大聖人様の仏法による成仏のことを言うのであります。つまり、すべての者が、大聖人様の妙法蓮華経によって必ず救われ、そこに差別がないという意味です。

また、法華経の即身成仏についても、迹門りは理、本門じは事でありまして、本門の事の

即身成仏こそが「当位即妙、本有不改」、凡夫は凡夫のまま、本有無作の三身如来となることが明かされているのであります。

次に、法華經の流布する時に在世と末法の二度があり、また修行においても二意があると説かれております。つまり、末法の機にかなうのは大聖人様の三大秘法の南無妙法蓮華經以外にはなく、その南無妙法蓮華經の題目を弘められているのは大聖人様御自身であると明かされているのであります。

さらに、天親、竜樹、天台、伝教も、末法出現の三大秘法を恋慕^{した}っていると仰せられ、最後に、女性の身でありながら即身成仏という重要な法門を尋ねた、対告衆の妙一女^{たいごうしゆ}に対して激励をされ、その求道心^{ぐどうしん}について称賛されております。

さて、本文に入りますと、まず「又法華經の即身成仏に二種あり。迹門は理具^{りぐ}の即身成仏、本門は事の即身成仏なり」とあります。

今、申し上げました通り、即身成仏というのは、衆生が凡夫の身そのままに成ることを言います。法華經以前の諸經におきましては、悪人は善人に身を変え、そして歴劫修行^{りゃっこう}という長い時間をかけた仏道修行をして、ようやく仏に成ると説かれてきたのであります。

この歴劫修行は無量劫と言われ、無量とは量^{はか}ることができないという意味で、劫というのは時間ですから、長い長い時間をかけて修行をするのです。

例えば、小乗の菩薩は三僧祇^{そうぎ}、すなわち三阿僧祇劫という長い時間をかけて、ようやく修行を終えられると言います。

また通教の菩薩は、今度は動蟪塵劫^{どうゆじんこう}と言ひ、この動蟪塵劫は「動もすれば塵劫を蟪^{やや}ゆ^こ」と読みますが、塵劫とは塵点劫のことで、五百塵点劫とか三千塵点劫という、あの塵点劫のことです。つまり、世界を微塵にして、その一塵を一劫と数えるくらいの極めて長い時間をかけて、ようやく修行が終わるということであります。

さらに、別教の菩薩は多俱低劫^{たぐてい}と言ひまして、俱低とは千万とか億の意で、これも同じように、非常に長い時間をかけて修行して、そしてようやく成仏をすると説かれております。

しかし法華經では、こういった歴劫修行によらず、妙法の功德力^{りき}によって、凡夫の身そのままに成れると、成仏が許されているのであります。

例えば、法華經提婆達多品では、八歳の竜女の即身成仏が示されております。このことについて、伝教大師は『法華秀句』に、

「能化の竜女は歴劫の行無く、所化の衆生も歴劫の行無し。能化所化俱に歴劫無し、妙法の経力^{もつ}を以て即身に成仏す」

と説かれております。

もともと、この即身成仏の義は、法華經によって立てられた極めて重要な御法門でありまして、『三世諸仏総勘文教相廢立』には、

「己心^{こしん}と仏心とは異ならずと観ずるが故に、生死の夢を覚^{さま}して本覚の寤^{うつつ}に還^{かえ}るを即

身成仏と云ふ」(御書 一四一六〇)

と説かれております。

この「本覚の寤」ということは、衆生は本来、そのままの仏の覚体であるという、真実の悟りのことでもあります。これは「生死の夢」に対する言葉でありまして、この本来固有の覚体は、常住にして不変・不壊ふえの故に、寤と言うのです。

よく「夢か、寤か」などと言うでしょう。あれです。いわゆる現実のことですね。この寤に還ることを即身成仏と言うのである、と仰せられているのであります。

そして即身成仏には、迹門の理具の即身成仏と、本門の事の即身成仏の二つがある、と仰せになっております。

まず「迹門は理具の即身成仏」というのは、法華経迹門では爾前経の二乗不作仏、女人不成仏を打ち破り、一切衆生にことごとく仏性のあることが明かされました。

すなわち、譬喩品で舎利弗に華光如来の記別が与えられ、未来の成仏が明らかにされました。

記別の「記」は、仏様が未来世における弟子の仏果を予言し、成仏きを記することで、「別」は、具体的に弟子の未来世の成仏の時や国土、それから仏様の名前などを分別することを言い、仏様が弟子に記別を授けることを「授記」と言います。法華経のなかに「授記品」という品ほんがありますが、その授記であります。

この記別を与えて二乗の成仏を明かしたあと、授記品では、須菩提しゅ ぼ だい・摩訶迦旃延か せん ねん・摩訶迦葉か しょう も っ け ん れん・目犍連の四大声聞に記別して、その成仏を明かし、さらに提婆達多品におきましては、竜女の成仏すなわち女人の成仏と、それから提婆達多すなわち悪人の成仏、その即身成仏を説き明かされたのであります。

しかし、これはあくまでも、未来における成仏の可能性を説いたに過ぎなかったものであり、それ故、この成仏を「理具」と言われております。つまり、理具というのは、真理として本来、具そなわっていることを言いまして、理の上では成仏することが具わっているという意味であります。

それに対しまして「本門は事の即身成仏」とありますように、本門と迹門とでは、事と理の違いがあるということです。

法華経本門において、釈尊は、まず御自身の身の上における始成し じ ょ う し ょ う が く正覚を打ち破り、久遠実成く お ん じ つ じ ょ うを顕しました。

始成正覚というのは、「十九出家、三十成道、八十入滅」と言われるように、爾前迹門では、釈尊は三十歳の時に正覚を成ぜられた仏様だとおっしゃってございました。これを始成正覚の仏と言います。寿量品では、これを打ち破って久遠実成を説き、つまり久遠の昔からの仏様であることを顕されたのです。このように、本門において始成正覚を打ち破って久遠実成を顕し、釈尊自身の振る舞いの上に即身成仏の事実の相をお示しあそばされた故に「事」と言うのであります。

しかし、もう一つ文底観心の上から拝すれば、釈尊の仏法は、あくまでも本門・迹門

共に理の上に過ぎず、再往、本門寿量品の文底に秘沈された南無妙法蓮華經によつてのみ、即身成仏ができるのであります。

そのことは、例えば『本因妙抄』に、

「一代応仏のいきをひかえたる方は、理の上の法相なれば、一部共に理の一念三千、迹の上の本門寿量ぞと得意せしむる」(同 一六八四頁)

と説かれております。つまり、天台の一念三千の観法もまた現実の事相の内奥にある真理を観ずる理観であるから、これは理の一念三千になるという意味であります。

次に「今本門の即身成仏は当位即妙、本有不改と断ずるなれば、肉身を其のまゝ本有無作の三身如来と云へる是なり」と仰せになっております。

この「当位即妙」は「当位即ち妙なり」と読み、これは妙樂大師が説かれた『法華玄義 釈籤』(玄義会本上二五五頁)のなかの御文であります。十界に差別される衆生が、そのままの位を変えることなく即、妙覚つまり仏であることです。これは、法華經で初めて明かされた、即身成仏の御法門であります。

また「本有不改」というのは、九界の衆生が各自の位を改めることなく、そのまま即身成仏することを言うのであります。

次に「本有無作の三身如来」の「本有」とは、本来、ありのままに存在するもの、もともと具わっていることを言ひまして、「無作」は、有作あるいは造作に対する言葉であります。故に「本有無作」というのは、本来、自然に常住して、他によつて作られたものではないということでありまして。

「三身如来」については、皆さん方も時々お聞きになつていらっしゃるでしょう。法身如来、報身如来、応身如来のことでありまして。

法身如来というものは、法ですから、三世にわたる仏としての真理それ自体を指すのであります。次の報身如来は、真理を照らす智慧の用きを指します。そして応身如来は、衆生や外界に應じて変現する仏の力用を指すのであります。

この三身の関係は、法身を所証の理境とし、さらに報身を能証の智慧とし、この境智が合して起こす用きを応身とすると説かれております。すなわち「本有無作の三身如来」というのは、法報応の三身が即、一身に顕れた、久遠元初の自受用身、すなわち宗祖日蓮大聖人様のことを指すのであります。

また、この三身は仏のみに限らず、十界互具の当体として、私ども一切衆生に本来的に具わっており、妙法を信受することによつて、この三身を自己の一身に顕現することができる、すなわち我々も仏身を成ずることができるのであります。つまり、大聖人様の仏法における本門の即身成仏というのは、まず本門の本尊を信受することによつて、凡身を改めることなく、その身そのまま成仏することができ、本有無作三身と開くことができるということでありまして。

このことについて『御義口伝』には、

「此の無作の三身をば一字を以て得たり。所謂信の一字なり」(御書 一七六六頁)

と仰せられております。つまり、今申し上げた通り、この無作三身を我が身に顕すかどうかは、結局、私どもの信の一字にすべてかかっているのです。

次に「此の法門は一代諸教の中に之無し。文句に云はく『諸教の中に於て之を秘して伝へず』等云云」とあります。しかも、この即身成仏の法門は、釈尊一代五十年の諸教のなかには説かれておらず、したがって天台大師も『文句』に「諸教の中に於て之を秘して伝へず」とおっしゃっているのです。

つまり、真の即身成仏の法門とは、久遠元初の御本仏宗祖日蓮大聖人様が末法に御出現あそばされ、初めて説き明かされた御法門のことなのであります。このことは、まことに大事でありまして、御本仏の御出現を待って、すべての御法門が事実の上に展開されることになるのであります。

次に、九番目です。

9 妙一女御返事

又法華經の弘ませ給ふべき時に二度有り。所謂在世と末法となり。修行に又二意有り。仏世は純円一実、滅後末法の今の時は一向本門の弘ませ給ふべき時なり。(御書一四九九〇一五行目)

これは、釈尊の仏法と大聖人様の仏法を比べて、弘まる法自体の相違と、その修行実践の違いについて述べられている御文であります。

初めに「又法華經の弘ませ給ふべき時に二度有り。所謂在世と末法となり」と仰せになっております。

そもそも、法華經の弘教の次第、順序について言えば、通常、正像末の三時に分けられます。そのなかでも、像法時代は法華經迹門が流布すべき時でありまして、中国においては天台大師が出現し、五時八教の教判をもって法華經第一と立て、当時の南三北七の邪義を破折して仏教界を統一し、『摩訶止観』によって衆生を化導あそばされました。一方、日本におきましては、伝教大師が法華經を弘めて、迹門の戒壇を比叡山に建立し、法華迹門の広宣流布をしたわけであります。

しかし、大聖人様は本抄において、法華經流布の時は在世と末法の二度であるとして、天台、伝教の像法時代を加えておりません。その理由については、日寛上人が『撰時抄文段』(御書文段三一〇〇)に、五つの意義を挙げて仰せられております。

一つには「像法には此の經の利生未だ盛んならざるが故」とおっしゃっております。このなかの「利生」とは衆生を利益する力ということですが、『薬王品得意抄』のなか

に、
「法華經は正像二千年よりも末法には殊に利生有るべし」(御書 三五〇)

という御文があり、そのことを言っているわけであります。

二には「像法には独頭あらの妙能、未だ彰あらわれざるが故」と仰せです。つまり、妙法蓮華經ひとのみが独り、諸經かいを開して一仏乗を顯くす勝れたくのう機能を持っているが、それがまだ像法時代には顯れていないという意味であります。

三には「像法には正直の妙法を弘めざるが故」と御指南であります。これは『立正觀抄』に、

「天台大師はりょうぜん靈山の聽衆、如来出世の本懷のを宣いべたまふとい雖も、時至らざるが故に妙法かの名字を替かへて止觀と号す。迹化しやくけの衆なるが故に本化ほんげの付嘱ふぞくを弘め給はず。正直の妙法を止觀と説きまぎらかす。故に有りのまゝの妙法たいごんならざれば帶權たいごんの法に似たり」(同 七六九ぎ)

とお示しなのです。このなかに「有りのまゝの妙法ならざれば帶權の法に似たり」とありますが、この「帶權」とは、帶おは「帶おびる」ということで、權かは「權かりの教え」という意味ですから、つまり權かりの教えを帶おびている法門だと言うのであります。

それから四には「像法には事行の三千を顯あらわさざるが故」と御指南であります。これは『觀心本尊抄』に、

「像法ちゆうまつの中末ちゆうまつに觀音・藥王、南岳・天台等と示現じげんし出現して、迹門じげんを以て面おもてとな為し本門うらを以て裏うらと為して、百界千如そ、一念三千其の義を尽くせり。但理具ただを論じて事行じぎょうの南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊これ、未だしよせんえん広く之えんを行ぜず。所詮えん円機有って円時無き故なり」(同 六六〇ぎ)

と仰せになっているからであります。

最後に、五には「像法には未だじんび深秘の大法を弘めざるが故」と仰せです。これは『撰時抄』に、

「迦葉かしょう・阿難あなん・馬鳴めみょう・竜樹りゅうじゆ・無著むじやく・天親乃至天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深秘の正法、經文おもての面おもてに現前いまなり。此の深法今末法の始め五五百歳に一閻浮提に広宣流布すべき」(同 八五一ぎ)

と説かれております。したがって、像法には、いまだ、こういった深秘の正法は弘められていないということでもあります。

このような理由によりまして、像法時代の流布は、眞実の法華經、つまり文底下種の妙法蓮華經の流布にあらざるが故に、大聖人様は本抄において、法華經の流布の時は、釈尊在世の時と、大聖人様が御出現あそばされた末法の二度であって、その中間の天台、伝教の像法時代を加えられていないのであると、日寛上人は御指南あそばされているのであります。

次に「修行に又二意ぶつせ有り。仏世は純円一実、滅後末法の今の時は一向本門いっこうの弘まらせ給ふべき時なり」と仰せであります。先に妙法蓮華經が弘まるべき時について、在世と末法の二時であると示されましたが、続いて修行においてもまた、二つの意味があるとの仰せであります。

すなわち、仏の在世に弘まるのは「純円一実」の法であり、「純円」というのは純粹

無二、あるいは円融円満の教えという意味であり、「一実」というのは一仏乗を説くお経のことです。

仏世の純円一実とは法華経を指すのでありますが、滅後末法の今の時においては、一向に本門の肝要である南無妙法蓮華経の弘まる時であるとの仰せであります。肝要というのは、肝心とか文底という意味と全く同じであります。

されば『高橋入道殿御返事』には、

「末法に入りなば迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、薬王・観音等のゆづられしところの小乗経・大乘経並びに法華経は、文字はありとも衆生の病の薬とはなるべからず。所謂病は重し薬はあさし。其の時上行菩薩出現して妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生にさつくべし」(同 八八七〇)

と仰せであります。

また『上野殿御返事』には、

「今、末法に入りぬれば余経も法華経もせんなし。但南無妙法蓮華経なるべし。かう申し出だして候もわたくしの計らひにはあらず。釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌千界の御計らひなり。此の南無妙法蓮華経に余事をまじへば、ゆゝしきひが事なり。日出でぬればとぼしびせんなし。雨のふるに露なにのせんかあるべき。嬰兒に乳より外のものをやしなうべきか。良薬に又薬を加へぬる事なし」(同 一二一九)

と仰せであります。

つまり、まさしく今時末法において流布すべき一切衆生救済の大法は、ただ法華経本門寿量品文底秘沈の南無妙法蓮華経に限るということになるのであります。

次は、十番目の『上野殿母尼御前御返事』です。

10 上野殿母尼御前御返事

一切経の心は愚癡の女人などの唯一時に心うべきやうは、たとへば大塔をくみ候には先づ材木より外に足代と申して多くの小木を集め、一丈二丈計りゆひあげ候なり。かくゆひあげて、材木を以て大塔をくみあげ候ひつれば、返って足代を切り捨て大塔は候なり。足代と申すは一切経なり、大塔と申すは法華経なり。仏一切経を説き給ひし事は法華経を説かせ給はんための足代なり。正直捨方便と申して、法華経を信ずる人は阿弥陀経等の南無阿弥陀仏、大日経等の真言宗、阿含経等の律宗の二百五十戒等を切りすて抛ちてのち法華経をば持ち候なり。大塔をくまんがためには足代大切なれども、大塔をくみあげぬれば足代を切り落とすなり。正直捨方便と申す文の心是なり。(御書一五〇九六行目)

この話は皆さん方も、それぞれの指導教師の方々や折に触れて、よくお聞きになっていると思います。

まず、本抄は弘安三（一二八〇）年十月二十四日、南条時光殿の弟に当たる故七郎五郎殿の七七日忌に当たりまして、種々の御供養を送ってこられたことに対して、上野殿母尼御前に宛てて与えられた御返事であります。

この御書を拝読しますと、初めに、故七郎五郎殿の七七日忌菩提のために送られてきた数々の御供養に対して、大聖人様がお礼を述べられております。

次に、一代仏教中、法華経が最勝であることが示され、その次に故人の成仏を決して信心を勧め、さらに法華経の行者は必ず諸天の加護があるべきことや、諸仏の法華経を守る所以について述べられております。そして、輪陀王と白馬の故事を引いて法華経の功德を述べ、重ねて法華経の行者には諸天の守護があるべきことを示し、終わりに、我が愛する子を失われた母尼御前を慰められております。

このお手紙を頂いた上野殿母尼御前は、南条兵衛七郎殿の奥様であり、七郎次郎時光殿および七郎五郎殿のお母さんであります。

これは前にも申し上げましたが、南条時光殿は、南条七郎次郎と言います。七郎と次郎と、名前が二つ続くのですが、これは親の名前が先に来るのです。南条七郎という方がお父さんで、その南条七郎さんの次男だから七郎次郎になるのです。だから、南条七郎太郎と言え、南条七郎さんの長男ということです。同じように、七郎五郎という方は、七郎さんの五番目の男の子ということになるのです。昔は、このような名前の付け方がありました。

亡くなった南条七郎五郎殿は、今申し上げました通り南条兵衛七郎殿の五男で、弘安三年六月十五日には、お兄さんの南条時光殿と共に身延の大聖人様のもとを訪れて、お目通りをしております。この時、大聖人様からも将来をたいへん期待されたのでありますが、それから約三カ月ののち、九月五日に亡くなってしまったのであります。

大聖人様は、この訃報を聞かれると直ちに筆を執られて、『上野殿御返事』を差し上げて、そのなかで大聖人様は次のようにおっしゃっております。現代文に訳しますと、

「人は皆、生まれては死ぬのが習いとは、智者も愚者も、上の人も下の人も皆、承知していることであるから、今、初めて嘆いたり、驚いたりすることではないと、自分も思い、人にも教えてきたが、さて、いよいよその時に当たってみれば、夢か幻か、いまだに判断がつかかねるほどである。

ましてや、母は、いかばかり嘆かれていることであろうか。父母にも兄弟にも先立たれ、最愛の夫にも死に別れたが、子供が多くおられたので心が慰められておられたであろうに…。

かわいい子で、しかも男の子。容貌も人に優れ、心もしっかりとして見え、よその人々もさわやかな感じをもって見ていたのに、はかなく亡くなってしまったことは、花の蕾が風にしぼみ、満月が突然になくなってしまったようなものである。

本当のこととも思えないので、励ましの言葉も書きようがない」（御書 一四九六 取意）

と、母尼御前にお手紙を出されているのです。大聖人様の優しいお言葉を頂戴し、とても心を打たれたのではないかと思います。

さらに、この手紙の追伸には、

「六月十五日にお会いした時には、あっぱれ肝のある者だな、すばらしい男だな、と拝見をしていたのに、再びお会いすることができないとは、なんとも悲しいことである。しかし、七郎五郎殿は仏・法華経を深く信仰されていたから、臨終も立派だったのである。だから、心はきっと父君の南条兵衛七郎殿と一緒に霊山浄土に参り、共に手を取り合って喜ばれていることであろう」（同^二取意）

とあり、非常に情愛に満ちた、励ましのお手紙を差し上げているのであります。

また、ただいま拝読いたしました本抄のなかでも、

「抑^{そもそも}故五郎殿かくれ給ひて既に四十九日なり。無常はつねの習ひなれども此の事うちきく人すらなをし^開のびがたし。い^猶わうや母となり妻となる人をや。心のほどをし^忍はか^況られて候」（同 一五一^二）

と、七郎五郎殿の死を深く悼^{いた}まれておることがよく拝せられ、大聖人様のお心遣いと、本当に温かいお心の内が伝わってくる思いであります。

さて、本文に入りますと、本文の初めに「一切経の心は愚癡の女人などの唯一時に心^得うべきやうは」とあります。この場合の「一切経」とは、法華経を含まない爾前経のことを指します。つまり、法華経と爾前経とを比べると、爾前経の心は、愚癡の女人の、いつときの気休めに説かれたものに過ぎない、と仰せなのです。

すなわち、この御文の前に、方便品の、

「世尊は法^{ひさ}久^{のち}しうして後^{かなら} 要^{まさ}ず当に真実を説きたもうべし（世尊法久後 要当説真実）」（法華経 九三^二）

の文、あるいは、

「正直に方便を捨てて 但^{ただ}無上道を説く（正直捨方便 但説無上道）」（同 一二四^二）

などの経文を挙げて、法華真実について説かれておりますが、その法華真実に比べて爾前経は、法華真実を顕すための方便の教えであると示されているのであります。

すなわち、方便品の「世尊は法久しうして後 要ず当に真実を説きたもうべし」とは、仏様は四十二年間という長い間、方便の教えを説いて衆生の機根^{きこん}を調^とえ、のちに真実の教えである法華経を説かれましたが、これは、仏が教えを説く目的は一切衆生を成仏させることにあり、最後八年に説かれた法華経には、四十余年の方便権教と異なり、真実の教えたる一乗の法が説かれている、ということを行っているのです。

また「正直に方便を捨てて 但無上道を説く」という経文は、釈尊が四十二年間にわたって説いてきた華嚴、阿含、方等、般若等の諸経は、方便の教えであり、権教つまり権りの教えである。したがって、それらを捨てて、実教である無上道、すなわち極説の法である法華経を説かれたのである、と仰せになっているのであります。

その説明について、「たとへば大塔をくみ候には先づ材木より外に足代と申して多くの小木を集め、一丈二丈計りゆひあげ候なり。かくゆひあげて、材木を以て大塔をくみあげ候ひつれば、返って足代を切り捨て大塔は候なり」と仰せであり、これはまさしく、大塔と足代の例を引かれて、法華經と爾前經との違いを示されている御文であります。

すなわち、大塔を建てるには、まず足代、つまり足場を造り、その足場によって大塔を組み上げていくのが、ごく普通であります。しかし、その塔が出来上がれば、今度はその足場は邪魔になりますから、取り払わなければならないのです。同様に、爾前権經を元にする真言あるいは華嚴そのほかの教えは全部、足代であるのだから、法華經が説かれたのちには全部、取り払わなければならない、ということを行っているのです。

したがって、その次に「足代と申すは一切經なり、大塔と申すは法華經なり。仏一切經を説き給ひし事は法華經を説かせ給はんための足代なり」とありますが、この「一切經」とは、法華經を除いた一切の經という趣旨であります。

なんのために、華嚴經とか、阿弥陀經とか、色々なお經が説かれたかということ、それは最後に法華經を説くためであり、その例として、足代と大塔を比しております。

つまり、大塔を造るために設置されたのが足場であって、一切經はまさに足場であり、造り上げられたところの大塔は法華經である。だから、仏様が一切經を説かれたのは、法華經を説くための足代・足場であったという意味であります。

これと同じようなことが、『念仏無間地獄抄』に、

「譬へば塔をくむに足代をゆふが如し。念仏は足代なり、法華は宝塔なり。法華を説き給ふまでの方便なり。法華の塔を説き給ふて後は、念仏の足代をば切り捨つべきなり。然るに法華經を説き給ふて後、念仏に執著するは、塔をくみ立てゝ後、足代に著して塔を用ひざる人の如し。豈違背の咎無からんや。然れば法華の序分無量義經には『四十余年未だ真実を顯はさず』と説き給ふて念仏の法門を打ち破り給ふ。正宗法華經には『正直に方便を捨てゝ但無上道を説く』と宣べ給ひて念仏三昧を捨て給ふ」

(御書三九〇)

と示されております。

つまり、念仏をはじめとする爾前権經は全部、足代であるから、大塔が出来上がれば、その足代は取り払わなければならない、ということでもあります。

次に「正直捨方便と申して、法華經を信ずる人は阿弥陀經等の南無阿弥陀仏、大日經等の真言宗、阿含經等の律宗の二百五十戒等を切りすて抛ちてのち法華經をば持ち候なり」とあります。

法華經の方便品に「正直に方便を捨て」という御文があります。そのように、法華經を信ずる人は、阿弥陀經の南無阿弥陀仏とか、大日經を依經とする真言宗、あるいは阿含經を依經とする律宗の二百五十戒などの謗法を抛って、ただ法華經を信じなければならない、との仰せであります。

二百五十戒というのは、小乗教を修行する比丘が受持すべき戒のことです。これは比丘ですから、男の僧侶のことで、女性である比丘尼の場合は五百戒になってしまうのです。すなわち、小乗教の二百五十戒をはじめ、爾前經の謗法を捨てて、正直に法華經を信じなければならぬと仰せられているのであります。

つまり今、末法では、正像時代の種々の戒律、例えば、今言った二百五十戒とか五百戒などという戒律は無益・無用であり、全く必要ないのです。このことについては『教行証御書』に、

「此の法華經の本門の肝心妙法蓮華經は、三世の諸仏の万行万善の功德を集めて五字と為り。此の五字の内に豈万戒の功德を納めざらんや。但し此の具足の妙戒は一度持つて後、行者破らんとすれど破れず。是を金剛宝器戒とや申しけんなど立つべし。三世の諸仏は此の戒を持つて、法身・報身・応身など何れも無始無終の仏に成らせ給ふ。此を『諸教の中に於て之を秘して伝へず』とは天台大師書き給へり。今末法当世の有智・無智、在家・出家、上下万人此の妙法蓮華經を持つて説の如く修行せんに、豈仏果を得ざらんや」(同 一一〇九)

と仰せになっております。つまり「此の法華經の本門の肝心妙法蓮華經は、三世の諸仏の万行万善の功德を集めて五字と為り。此の五字の内に豈万戒の功德を納めざらんや」とお示しのように、二百五十戒とか五百戒等の戒律は無用であり、御本尊を信じて南無妙法蓮華經を唱えていく、その妙法蓮華經の功德のなかにすべてが含まれているのです。

したがって『観心本尊抄』には、

「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り与へたまふ」(同 六五三)

と仰せられているのであります。

次に「大塔をくまんがためには足代大切なれども、大塔をくみあげぬれば足代を切り落とすなり。正直捨方便と申す文の心是なり」とありますが、これは、大塔が組み上がるまでは足代・足場は大事ですが、大塔が出来上がったならば、今度は足代を取り壊さなければならぬ。これが「正直捨方便」の意味である、とおっしゃっているのです。

つまり、釈尊は自らの悟りの真実を直ちに説いたのでは、機根が調っていない衆生はなかなか理解することができないということで、初めから法華經を説かなかつたのであります。これを「調機調養」と言い、聞く人の能力・機根を調えるために、四十二年間にわたって様々なお経を説いてきたわけです。

例えば、子供に勸善懲悪を教えるために「花咲じじい」などの話をするところがあるでしょう。ああいった話は、たしかに子供でもよく理解できますよね。しかし、大人になって、あれが本当にあった話だとは思わないでしょう。あれは、あくまでおとぎ話なのです。だから、爾前權經に固執しているのは、おとぎ話に固執して真実を知らない姿と同じなのです。つまり、本当に花咲じじいがいて、花が咲いたと想像していたら、間違いなのです。あれは譬え話として説かれたものであり、爾前權經もそういうものなの

です。この辺のけじめがはっきり付かないで、いつまで経っても方便のために説かれたお経に固執していると、邪義邪宗の害毒に犯されたままになってしまうのです。

だから、成仏の法である妙法蓮華経を唱えないで、反対に不成仏の法である爾前権経を修行する人は、まさに大塔を捨てて足代を有り難がっているようなものであると仰せられております。これを、大聖人様は、

「かしこくはかなき人と申すは是なり」(同 一五〇九[㊟])

とおっしゃっているのです。「かしこくはかなき」つまり、一見、賢そうだけれども、実は愚か者だと言っておられるのであります。

まさしく我々の信心は、謗法を捨てて、法華本門寿量品文底秘沈の妙法蓮華経を信ずるところに、真の即身成仏がありまして、謗法は厳しく誡めなければならないのであります。

されば『曾谷殿御返事』には、

「謗法を責めずして成仏を願はず、火の中に水を求め、水の中に火を尋ぬるが如くなるべし。はかなしはかなし。何に法華経を信じ給ふとも、謗法あらば必ず地獄にをつべし。うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し。『毒氣深入、失本心故』とは是なり」(同 一〇四〇[㊟])

とあり、この御文も皆さん方はよく聞いていらっしゃることと思いますが、まさに大聖人様は謗法厳誡を強く御教示あそばされております。

また、そのほかにも『善無畏抄』に、

「設ひ八万聖教を読み大地微塵の塔婆を立て、大小乗の戒行を尽くし、十方世界の衆生を一子の如くに為すとも、法華経謗法の罪はきゆべからず。我等過去現在未来の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受くるは偏に法華経誹謗の罪なるべし」(同 五〇九[㊟])

と仰せです。まことに厳しい御指南です。結局、謗法があると成仏できないということです。

同じように『阿仏房尼御前御返事』には、

「夫法華経の意は一切衆生皆成仏道の御経なり。然りといへども、信ずる者は成仏をとぐ、謗ずる者は無間大城に墮つ。『若し人信ぜずして斯の経を毀謗せば即ち一切世間の仏種を断ぜん。乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん』とは是なり」(同 九〇五[㊟])

と示され、謗法があると、結局は墮地獄、つまり地獄に墮ちてしまうということを、ここでは厳しくおっしゃっておられます。

また『妙法比丘尼御返事』には、

「仏法の中に入りて悪しく習ひ候ひぬれば、謗法と申す大なる穴に墮ち入りて、十悪五逆と申して、日々夜々に殺生・偷盗・邪淫・妄語等をおかす人よりも、五逆罪と申して父母等を殺す悪人よりも、比丘・比丘尼となりて身には二百五十戒をかたく持

ち、心には八万法蔵を^浮うかべて候やうなる智者聖人の、一生が間に一悪をもつくらず、人には仏のやうに^思をものはれ、我が身も又さながらに悪道にはよも墮ちじと思ふ程に、十悪五逆の罪人よりもつよく地獄に墮ちて、阿鼻大城を^{すみか}栖として永く地獄を^出いでぬ事の候ひけるぞ」(同 一二五八^ノ)

と、謗法があると、いつまで経っても地獄に墮ちたままだと示されております。

私達は、いつの間にか、知らず知らずのうちに謗法を犯すことがありますから、日蓮正宗の教えのなかでも、謗法厳誠ということが言われるのです。

これはいつも言う話でありますけれども、よく私達が小さい時にお師匠様から聞きましたのは、よその神社仏閣の前で、わらじの紐が^{ひも}切れても、そこでは結ぶなと言われたのです。その意味は解りますか。頭を下げるからです。心ならずとも、神社仏閣の前で頭を下げてはいけません。だから、たとえ鼻緒が^{はな お}切れても、そこでは結ぶなと、昔はそれほど厳しく言っていたのです。今は鼻緒はないけれども、昔はそうやって謗法の恐ろしさを教えていたのです。今流に言えば、靴の紐が^と解けても、とでも言うのでしょうか。そのくらい謗法厳誠ということを知っていたのです。

まさに、謗法恐るべしでありますから、この文をよくよく心して、謗法は絶対に犯さないでいただきたいと思っております。

次に十一番目です。

1 1 上野殿母尼御前御返事

法華經と申すは三世十方の諸仏の父母なり、^{乳 母}めのとなり、主にてましましけるそや。かえると申す虫は母の^{こえ}音を食とす。母の声を聞かざれば生長する事なし。からぐらと申す虫は風を食とす。風吹かざれば生長せず。魚は水をたのみ、鳥は木を^{すみか}とす。仏も^{また}亦かくの如く、法華經を命とし、食とし、すみかとし給ふなり。魚は水にすむ、仏は此の經にすみ給ふ。鳥は木にすむ、仏は此の經にすみ給ふ。月は水にやどる、仏は此の經にやどり給ふ。此の經なき国には仏まします事なしと^{こころえ}御心得あるべく候。

(御書一五一〇^ノ一四行目)

この御文は、先程の御文の少しあとの部分であります。

この御文の前の部分を、現代風にして拝読いたしますと、

「法華經を拝見すると、法師品には『如来はこれらの人々を衣で覆われ、また三世十方の諸仏に護られるであろう』とある。この經文の意味は、東西南北、八方、ならびに三千大千世界のほか、四百万億那由他の国土に、十方の諸仏が続々と集まり、天には星のように、地には稲や麻のように並んでいて、法華經の行者を守護される有り様は、ちょうど大王の太子を、諸々の臣下が守護するようなものである。

ただ四天王の一類が護ってくれることさえ、有り難く、うれしいことなのに、一切

の四天王、一切の星宿、一切の日月、帝釈天、梵天等が守護されるのだから、満足すべきことである。その上、一切の二乗、一切の菩薩、兜率内院の弥勒菩薩、迦羅陀山の地蔵菩薩、補陀落山の觀世音菩薩、清涼山の文殊師利菩薩などが、それぞれ眷属を伴って法華經の行者を守護されるのだから、満足すべきことであるのに、その上、申しわけなくも釈尊、多宝、十方の諸仏が親しく昼夜十二時に守護されるというのは、まことに有り難く、申し上げようもない。

かように有り難い法華經を、故七郎五郎殿は信心されて仏に成られ、今日は四十九日忌になるので、一切の諸仏が靈山淨土に集まられて、あるいは手に据え、あるいは頭を撫で、あるいは抱き、あるいは喜び、月が初めて出たように、花が初めて咲いたように、褒められていることであろう。

いったい、どうしてこんなに、三世十方の諸仏が法華經に限って、強いて守られるのであらうと考えると、それには理由があるのである」(御書 一五一〇 取意)と仰せになっているのです。

そして、その理由について、ただいま拝読した御文でお示しになるのであります。これも、やさしく言いますと、

「法華經というのは、三世十方の諸仏の父母であり、乳母であり、主君である。蛙は母の鳴き声を食物とするように、母の声を聞かなければ生長しない。また、迦羅求羅という虫は、風を食物としている」。

この「迦羅求羅」は想像上の虫で、『大智度論』によりますと、その身は極めて小さいけれども、風に遭うとたちまち大きくなって、一切のものを飲み込んでしまうという虫であります。

「その迦羅求羅は、風が吹かなければ生長しない。魚は水を抛り所とし、鳥は木を栖としている。仏もまた同じく、法華經を命とし、食物とし、栖とされている。魚は水に住み、仏はこの法華經に住まわれている。鳥は木に住み、仏はこの經に住まわれている。月は水に宿る。仏はこの經に宿られる。それ故に、この法華經のない国には、仏はましまさないと心得なさい」

とおっしゃっています。

ここで「法華經」とおっしゃっておりますのは、一往は釈尊の説かれた文上の法華經二十八品を指してはおりますけれども、再往、その元意を拝すれば、文底の法華經、すなわち法華經本門壽量品文底秘沈の南無妙法蓮華經を指しているのであります。この南無妙法蓮華經こそ、三世十方の諸仏能生の根源にして、久遠元初の御本仏すなわち日蓮大聖人が所持あそばされるところの本法であります。

されば『秋元御書』に、

「三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏に成り給へり」(御書 一四四八)

とお示しになるのと同じことを、この御文のなかでは「法華經」とおっしゃっているの

であります。

また『教行証御書』には、

「此の法華經の本門の肝心妙法蓮華經は、三世の諸仏の万行万善の功德を集めて五字と為り。此の五字の内に豈万戒の功德を納めざらんや。但し此の具足の妙戒は一度持って後、行者破らんとすれど破れず。是を金剛宝器戒とや申しけんなど立つべし」

(同 一一〇九^ぎ)

と仰せられております。

さらに『経王殿御返事』には、

「南無妙法蓮華經は師子吼の如し。いかなる病さはりをなすべきや。鬼子母神・十羅刹女、法華經の題目を持つものを守護すべしと見えたり。さいはいは愛染の如く、福は毘沙門の如くなるべし。いかなる処にて遊びたはぶるともつゝがあるべからず。遊行して畏れ無きこと師子王の如くなるべし。十羅刹女の中にも皁諦女の守護ふかゝるべきなり。但し御信心によるべし」(同 六八五^ぎ)

と仰せになっております。

諸天善神の守護ということ、よく言いますけれども、やはり諸天善神が守護せられるには、この最後の御一文のように、「但し御信心によるべし」なのです。

普段、あまり折伏もしない、勤行もしないという人は、ここにはいないと思いますけれども、普段は何もしないで、困った時にだけ一生懸命、御本尊様をお願いしても、それはだめですよ。やはり、普段から朝夕の勤行と折伏をしっかりと、その上で御祈念するならばいいのだけれども、普段、なんもしないで、ある日、突然、なんとかしてくれと言うのは、仏様も「待て、待て」となってしまうのではないのでしょうか。だから、やはり普段、日常からの信心が非常に大事だと思います。

朝、起きて、まず御本尊様にしっかりとお題目を唱える。そして、諸行事にも参加する。そうやって、信心活動の一つひとつやっけていくなかに、本当に我々の功德が累なっていくと思うのです。

まさに最後の「但し御信心によるべし」という御文を、今回の講習会に参加した方は、これ一つだけでも、しっかりと覚えておいていただきたいと思います。

また『御講聞書』には、

「法華經二十八品は影の如く響きの如し、題目の五字は体の如く音の如くなり。題目を唱へ奉る音は十方世界にとづかずと云ふ処なし。我等小音なれども題目の大音に入れて唱へ奉る間、一大三千界に至らざる処なし。譬へば小音なれども貝に入れて吹く時は遠く響くが如く、手の音纒かなれども鼓を打つに遠く響くが如し。一念三千の大事の法門とは是なり」(同 一八一^ぎ)

とあります。つまり、一念三千の妙法蓮華經には、このように計り知れないほど広大無辺なる功德があるとおっしゃっておられるのであります。

私達は平成三十三年の宗祖日蓮大聖人御聖誕八百年に向かって折伏を進めておりますが、この妙法蓮華經の功德を、一人ひとりが多くの方々に伝えていかなければならない、非常に大事な時を迎えているのだと思います。

昨日の夜も地震があったようでありまして、昨今、至る所で天変地天^{ちよう}が観ぜられます。一つひとつ、考えてみますと、やはり様々な依報における現象があるということは、正報である我々の如何^{いかん}が、依報に様々な影響を及ぼしているのです。

「依正不二」という言葉がありますが、正報というのは我々です。それに対して、依報というのは、我々を取り巻く環境のことを言います。この依報と正報は、依正不二と言われるように一体なのです。

だから、我々がおかしくなれば、やはりそれが世間のどこかしらに必ず様々な変化^{へんげ}をもたらしてくるわけです。我々が善きことを行えば、依報も本当に善き結果を招きますけれども、悪^あしきことであれば、これは天変地天となって現れてくるのであります。まさに「立正安国」、正を立てて国を安んずるということがあるのであります。

ですから、昨今の様々な現象を見た時に、やはり我々がしっかりとお題目を唱えて、一人でも多くの人に折伏を行じていかなければならないと思う次第であります。

特に今、法華講は念願でありました五〇パーセント増の誓願を、本当に皆様方のお力によって達成できました。しかし、ここで一呼吸、置かないで、次の平成三十三年、八十万人体勢構築へ向かって、是非、そのまま前進をしていただきたいと思ひます。

皆様方もみんな、末寺において指導教師の方々がおられ、また講中があつて、講頭さんを中心に折伏に励んでいらっしゃると思ひます。しかし、もう一つ、踏ん切りを付けて、一歩前進していくことが大事ではないかと思ひます。

我々は、常に現状から一歩前進することが大事だと思ひます。けっして、今の五〇パーセント増を達成したところに満足をしなないで、次の一歩を是非、踏み出していきたいと思ひます。

このことをお願いいたしまして、時間が来たようでありまして、本日の講義を終了いたします。